統一思想と医学～潜在意識の観点から

高知大学医学部臨床教授
医療法人社団真愛会　札幌ファミリークリニック　理事長　鈴木重裕

2012 年 9 月 2 日（日）

＜序論＞

性相と形状において、同時にその属性である陽性と陰性において認められる二性性相は、すべての存在の本質を現したものであるので、すべての問題を解決する万能のキーになることができる。特に、原理の本体であられる神様の本性相における内的性相の核は“心情”であり、愛の衝動である。これによって宇宙が創造され、神の対象として人間が産み出されてきたのである。神の“心情”の動機と目的と方向性によって生じた無限なる“真の愛”は、常に人間に溢れるばかりに降り注がれており、人間の潜在意識の根底に流れている。

しかし、人類始祖が「生殖器」において、神の戒めを破り、絶対「性」を完成できなかったことによって、「原罪」という「罪の根」が生じ、姦夫となったサタンの血統圏に堕落し、多くの病気を引き起こすという歴史を刻んできてしまったのである。すなわち、これを医学的に表現すれば、堕落以後の、潜在意識に潜む先祖由来の「否定的な記憶（潜在記憶）」が病気の根源的な原因であると考えられ、これが人間の否定的な言動や行動を引き起こし、さらには新たな病気や不幸な出来事を作り出して来た。言い換えると、この否定的な記憶が、人間の潜在意識に潜んでおり、神の心情（愛の衝動）から始まった真の愛による「神の意識」の働きを妨げてきたのである。

そこで今回、医学的観点から「神の意識」が人間の潜在意識にどの様に働いているのか、そして性相の形状化や形状の性相化について述べた後、統一思想さらに明らかにされた原理本体論の観点から、性相と形状、陽性と陰性に関わる潜在意識の本体について考察してみたいと思う。

＜本論＞

潜在意識に関して、次の三つの観点から述べてみたい。

Ⅰ．性相的側面から見た潜在意識 について

統一思想では、生物体の細胞や組織に入っている潜在意識（あるいは宇宙意識）を「原意識」と呼び、これを「生命」であるとしているが（UT, 323）、さらにこの原意識（目的意識：内的性相）が原映像（情報：内的形状）と授受作用することによって、生物におけるサイバネティックス（自動制御装置）が働くとみている（UT, 339-340）。

実際、一個の細胞においても、細胞質から核への情報の伝達とこれに対する核の反応が絶えず繰り返されながら、細胞の生存、増殖などが営まれており、サイバネティックス現象を認めることができる。従って、一個の細胞においても自律性あるいは主管性を見い出すことができ、そこには性相として合目的な要素である潜在意識が作用しているのである。

脳科学の観点から見れば、潜在意識はまず脳を刺激し、その刺激された脳が顕在意識を生じさせ、さらにその顕在意識が「習慣」や「情動」によって潜在意識へ刷り込まれていくという、潜在意識、脳、顕在意識の間にはループが形成されている。つまり、これらは、潜在意識を中心に繋がっているのである（Suzuki, 2009)。この点について、Rev. Moon は次のように述べている。「これは宇宙の秩序に関わる内容でもある。 すなわち、宇宙は宇宙なりの秩序にきちんと合うように動いており、この世の中のあらゆる存在物は、存在する以前からある原則を持っている。例えば、赤ん坊がこの世に生まれれば、誰が教えなくても、目を開けて呼吸をする。無理やりそのようにさせるのではなく、おのずとそのようになるのである。『おのずとなること』が宇宙の秘密を解く重要な鍵である（Rev. Moon)。」ここで、潜在意識に繋がっている意識の流れについて述べてみたい。

西洋医学の分野では、プリブラムが脳の「ホログラフィ理論」を提示しており、脳のどの部分も、脳全体の働き（記憶）を反映もしくは包含している、としている（Pribram, 1969; 1977)。すなわち、“部分は全体を表わす”のである。この背景には、潜在意識の流れが関与していることが示唆されている。

一方、東洋医学の分野では、潜在意識を「信号系（記憶系）」として捉えている。すなわち、潜在意識には「微小な刺激、あるいは信号に秘められた力」があり、「身体と宇宙とは何らかの信号系で連動している」として見るのである（Manaka & Itaya, 1990)。このことは、部分と全体の相関から 、体の一部分のみで全身の診断、治療ができる、ということを意味している。言い換えれば、「病の応は体表にあり」ということであり、病気は皮膚上に反応を呈する 、ということを示している。例えば、脈診や腹診、鍼灸療法、足裏マッサージ、リフレクソロジーやへそ按腹法などにその実際例をみることができる。

また、東洋医学には「気」という捉え方がある。これは、波動医学的アプローチの一つとして重要であるが、人体深部の組織内を走る「経絡（けいらく）」という目に見えないシステムが存在し、人体表面には経絡に沿って存在する「経穴（けいけつ）」という特異点が存在するとされている。

つまり、これらの経絡を通して、「気」として知られる目に見えない生長促進的な微細エネルギーが流れるのである。すなわち、気のエネルギーは経穴を通って体内に入り、さらに深部の臓器にも向かって流れていく。そして気のエネルギーは、生命を育む微細エネルギー的な特性をその臓器に送り届ける役割を果たすのである(Manaka & Itaya, 1990)。言い換えると、肉身の形態は、「気」（霊人体の微細エネルギー干渉パターン）と密接な関係があることを示しており、「気」は生命力の流れを決定している。この流れが、鍼灸であれば「経絡 」であり、ヨガであれば「チャクラ」であり、ここにも潜在意識が関わっているのである。

それでは、“気”の本質とは何か？それは「共鳴」であり、脳内の回路を変化させるものである。これは、チャクラの活性化などをもたらし、人間の霊性の復活にも大きな影響を与える 。これによって、霊的知覚を妨げる障害物、すなわち、否定的な潜在記憶を除去し、否定的感情から生じた行動パターンが改善されれば、高次レベルで発生した堕落由来の様々な病的状態が癒され、次第に縮小していくのである（Suzuki, 2009)。

次に、鍼灸における経絡現象について述べてみたい。中国古典医書『素問』『霊枢』によると、人間の体には左右 12 対の経絡というルートがあり、その内外を気血営衛（きけつえいえ）という人間の活動のもととなるエネルギーが流れており、一昼夜で５０周する。この循環が滞りなく行なわれていれば人は健康であるが、この気血営衛が一か所でも滞ったり、あり余ったり、不足したりすると、そこに痛みや病気が起こる。 そのような時に、鍼・灸を適当なツボ（経穴）に行なうと、気血の過不足を調節し、エネルギーの流動が滑らかになるので病気が治るのである。つまり、人間の身体には、重層的に発達した信号（記憶）系として作用する微細な内外の情報を鋭敏に感受し、弁別し、遠隔的に伝え、生態の調整に役だっているシステムが存在する（Manaka & Itaya, 1990)、と言うことになる。

これを統一思想の観点では、生体には二つの系、すなわちエネルギー系（形状システム）と情報系（性相システム）があると見る。前者のエネルギー系は、身体の本来の活動に関する系であり、筋肉の運動・血行・呼吸・消化等の機能をなし、後者の情報系は、このエネルギー系を制御・統制する機能をなすのである。従って、鍼灸は生体のエネルギー系を直接の対象とせず、むしろ情報系に干渉を与えるという手段を用いた治療法である、と言うことが言える。

それではなぜ、鍼灸における経絡現象が西洋医学に理解されなかったのであろうか？その理由は、見かけ上、非常に微小な刺激がなぜ大きな効果を生むのか、というメカニズムがわからなかったからである。逆に言えば、今まで西洋医学は情報系の制御という大切な可能性を十分に考慮して来なかった、ということなのである。

以上のことから、信号・記憶系、情報系、気などという表現で表わされている性相的側面において重要なことは、これらの働きは潜在意識によるものであり、神様から流れてくる「神の意識」の反映に他ならない、ということである。この潜在意識が形状の変化をもたらすのである。

それでは、潜在意識として作用する性相の本体とはどのようなものであろうか。性相と形状は共鳴し授受作用をなしているが、性相に向かう形状面（物質的側面）における究極について、まず述べてみたい。

Ⅱ．形状面（物質的側面）における究極の素粒子

特筆すべきことは、形状面での究極的原因として、“ヒッグス粒子”が発見されたことであろう（ATLAS Collaboration, 2012)。この粒子は素粒子に質量を与えるのである。これによって素粒子物理学における標準理論が完成した。つまり、ビッグバンから 100 億分の１秒後、真空の宇宙空間にヒッグス粒子で満たされた海が発生、それまで光速で飛んでいた素粒子に作用し、進みにくくすることで質量を与えたとされるのである。ここから、宇宙にある物質の劇的な創造が始まった。

まず素粒子の動きにブレーキがかかることで互いに集まり、３分後には原子核が誕生し、３０万年後には原子や分子ができ、さらに１０億年後の星や銀河の誕生へとつながったと考えられている。 つまり、素粒子が質量を持ったことで生命も誕生できたとしているのである。それゆえ、ヒッグス粒子は“神の粒子”と呼ばれており、宇宙論としての標準理論は完成した、と言われている。この粒子が見つかっても量子色力学、電弱相互作用と重力の統一理論を作る答えにはならず、宇宙の究極の起源に対して答えを与えない、とする研究者もいるが、ビッグバン、真空の相転移から物質の存在までを説明する重要な発見であることは間違いない。

しかし、未解決の問題がある。それは、「宇宙の物質・エネルギーの 96%は何でできているのか？」 そして、「素粒子の質量は素粒子ごとに異なるが、なぜヒッグス粒子が それぞれの素粒子に見合った質量を与えているのか？」という問題である。それを解くカギが、まさしく“神の心情”である。神の心情が形状である神の粒子と授受作用して、生命が創造されたのだと思われる。つまり、神の心情から始まったビッグバンが有形実体世界を創造したのである。そして、ヒッグス粒子が出現したこの瞬間が、生命の誕生というドラマの幕開けになったと言えよう。性相はこのようにして形状化（物質化）されていく。

逆に、形状（物質）が性相に影響を与えるものの実例として、ホメオパシー的思考がある。これは、ﾊｰﾈﾏﾝ方式（希釈の都度、振盪する方式）によって希釈した溶液中にかつて存在していた物質の分子が、何らかの方法で溶媒の分子構造に永久的な変化を与え、その結果、試薬の分子がなくなったあとも、その液体はそこを通過した物質による「刷り込み」があり、未処理の液体とは別のものになる、というものである。 これは、形状（物質）が消失した後でも性相面に影響を与えたことを示唆している。つまり、生物の信号系に関与する物質、これは非常に微量でありながらも、実際に生体の制御系に影響を与えているのである。

それでは、潜在意識の本体とはどのようなものであろうか？原理本体論の観点からみた潜在意識についてまとめてみたい。

Ⅲ．原理本体論の観点からみた潜在意識

原理本体論の観点からみると、神様は本性相と本形状の二性性相の中和的統一体であると同時に、本性相と本形状の属性である本陽性と本陰性の二性性相の中和的統一体としておられ、真の愛を中心とした統一的な理想存在である。

性相の中にも機能的要素（情知意）である内的性相（知的な作用の中には理性と悟性と感性がある）と、観念、概念、法則、数理的なことなど、形態の要素である内的形状がある。この内的性相と内的形状が授受し、そこにはロゴスという理法が生ずるが、授受作用によって一つになったものを性相と表現する。法則には必然性があり、これが自動性、自律性と関わっているが、ここに潜在意識の特性が隠されているのではないかと考えられる。

神様の本質的属性は心情、すなわち愛の衝動であり、被造世界に対してはこれが神様の創造の動機となっている。心情があるところにおいてのみ生命が表れることができ、生命があるところに発展運動、すなわち創造が展開される。つまり、心情は創造目的を指向する。創造目的は心情を充足させる喜びにあり、その喜びは被造物、とりわけ人間が神様に似た時に訪れることから、潜在意識は神様に似るように作用していると推察される。

神様の神性という性稟には、心情とロゴスと創造性が入っているが、これが正に、人間が神様に似ることができる、最も基本的な属性である。神様の属性は、絶対、唯一、不変、永遠である。これらが潜在意識の流れを生み出し、その原点である心情は、真の愛の根であり、その真の愛から真の生命、真の血統が連結される。そして、神様がご臨在され、そのすべてが一つになるところが「生殖器」なのである。

これを霊的に見る時、アダムの生殖器は神の内的な生殖器であり、エバの生殖器も神の内的な生殖器であり、相対的に男性の生殖器は女性の生殖器と一つになる。言い換えると、男性と女性の生殖器の細胞が、物質世界が最高に願う希望の終着地だというのである。物質もそこに行くことによって、神様の真の愛に接することができる高貴なものとなる。男性と女性の生殖器は、宇宙のすべての精髄の核が集まって作動している発電所のようなものであり、その力の源泉が真の愛である。絶対男性と絶対女性がお互いに引き合って絶対性を完成しようとする潜在意識の働きは、正にここから始まっている。

生殖器は生命よりも大切であり、神様まで与えても取り替えることのできないものである。創造物全体を合わせた以上に、夫婦がお互いの生殖器を崇拝して、それ以上に愛して、その価値を認めてこそ、神様が自分の家に訪ねて来られると言う。神様はそのように構想されたのである。これこそが「神の意識」として神様から発せられる潜在意識の究極的な終着点と考えられる。

しかしながら、ここで決して忘れてはならない重要なことは、神の心情の苦痛である。アダム、エバの堕落において、サタンは愛の姦夫である（愛の怨讐である）ことが示された。 すなわち、サタンは四大心情圏を蹂躙した怨讐中の怨讐である。その結果、（１）愛の怨讐を愛さなければならない神の心情の苦痛、（２）愛の怨讐の息子を自分の息子以上に愛さなければならない神の心情の苦痛、が生じたのである。神の心情の中に怨讐という観念があっては絶対的創造主、神になることができないからである（ODP, 82)。以上の、語ることができない神の心情の苦痛を知り、神を解放して差し上げなければならない。神を真に解放することとは、それはすなわち「絶対性の完成」であり、そこから真の喜びが始まるのである。

＜結論＞

１．堕落以後の、潜在意識に潜む先祖由来の「否定的な記憶（潜在記憶）」が病気の根源的な原因であると考えられるが、この記憶が、「神の意識」の働きを妨げ、これが人間の否定的な言動や行動を引き起こし、さらには新たな病気や不幸な出来事を作り出して来た。その意味で潜在意識の存在とその流れ、働きは重要である。

２．潜在意識は、信号・記憶系の「気」の流れとして形状的に捉える事ができる一方で、微量な物質が消えてなくなった後でも性相面への影響を見ることができる。性相と形状は潜在意識においても相関している。特に最近、形状面での究極が素粒子物理学によって明らかになってきた。

３．しかし、より重要なのは性相での核となる存在であり、それが「神様の心情（愛の衝動）」である。これが潜在意識の流れを生み出し、これこそが「神の意識」の根幹であり、潜在意識の本体なのである。そして神の真の愛のこの意識の中に私たちは生かされているが、一方において、神の心情の苦痛があることを知らなければならない。

４．従って、神を解放して差し上げることは私たちの究極の願いであるが、神様を真に解放することとは、それはすなわち「絶対性の完成」であり、そこから真の喜びが始まるのである。統一医学はその実現に向けて展開されなければならない。

References

ATLAS Collaboration (2012). Observation of a new particle in the search for the Standard Model Higgs boson with the ATLAS detector at the LHC.

Original Devine Principle. (2008). 原理本体論.　（日本語版）現文メディア

Pribram, K. (1969). The neurophysiology of remembering. Scientific American. 220:75.

Pribram, K. (1977). Languages of the Brain. Monterey, CA: Wadsworth.

Manaka, Y & Itaya, K. (1990). “体の中の原始信号”地湧社

Moon, S. (2009). The Fictitious Talk between Rev. Sun Myung Moon and Dr. Einstein. (in Japanese). “宇宙の根本を探して”（石井光治著：発刊予定）

Suzuki, S. (2009). The Principles of Medicine: Establishment and Development of Unification Medical Science. Unification Thought Institute.(「医学原論」光言社)

Unification Thought Institute. (2005). New Essentials of Unification Thought; Head-Wing Thought. Tokyo: UTI-JAPAN.